

俳諧
こと
たま
葉

五十嵐
和
絃

087257-000-7

特49-52

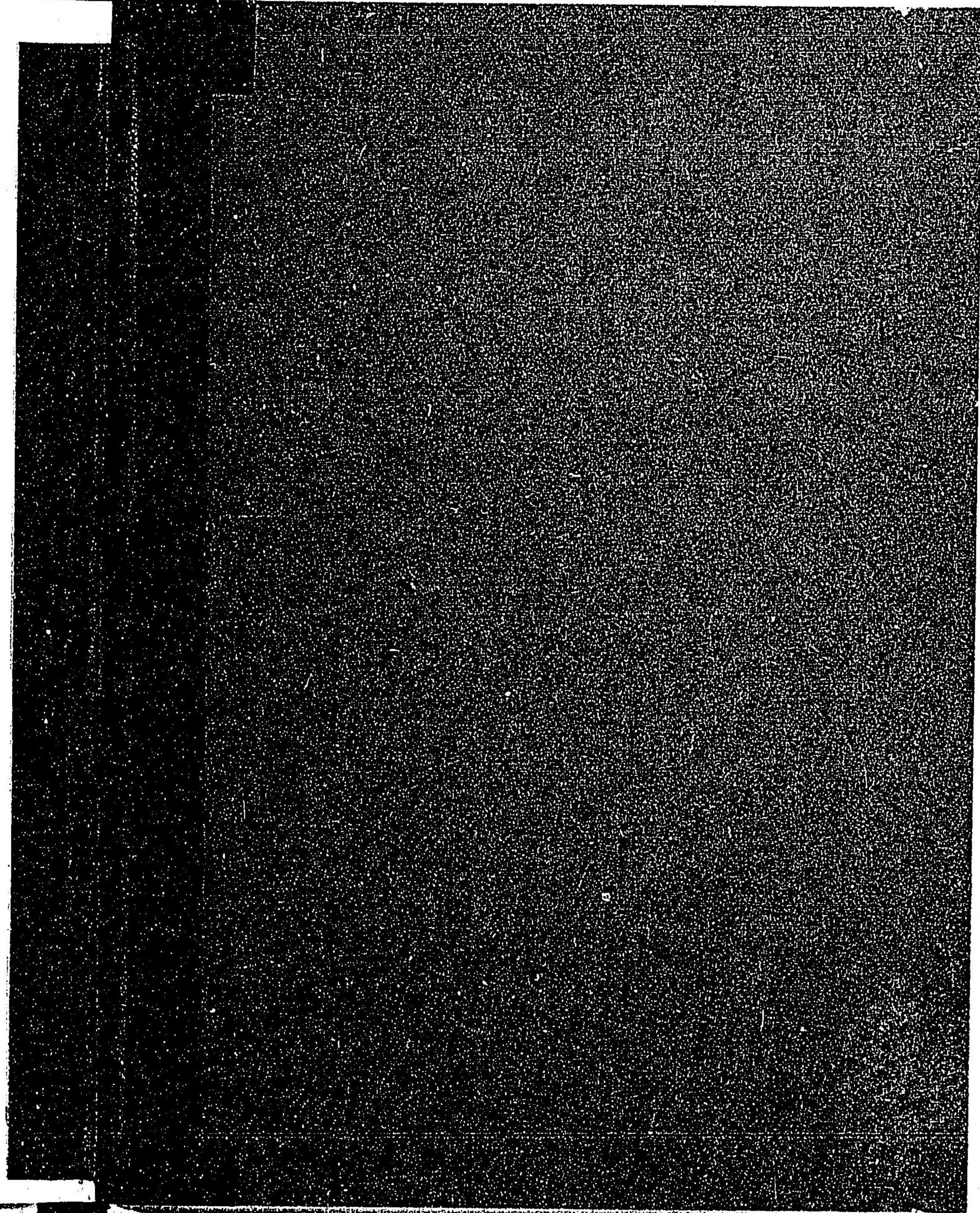
俳諧ことたま葉

五十嵐 和絃/著

M21

DBE-0480





EX 604

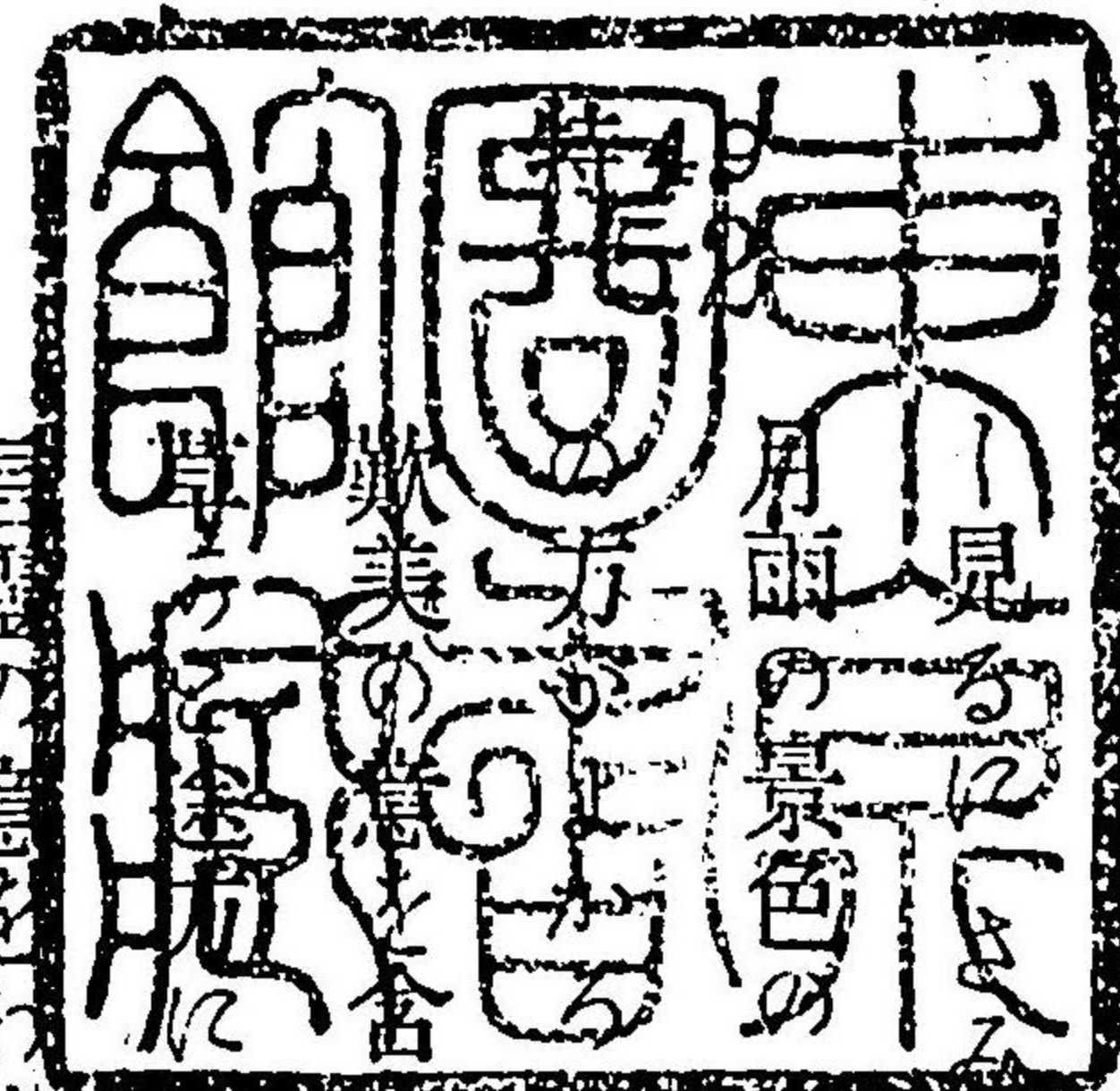
435
4
351

五十四卷 政雄著

俳諧
古今多生梨

維金館花版

No. 12291



俳あやぬえ業緒言

余此頃俳諧七部集中乃句を掲げて先年あらはしたる言靈眞澄鏡に照

し見るに「さるたれの色や淀川大和川」の如きやの字を置きたるは五

月雨の景色の「ら」かなるにみとれて淀川の方がよかろうや大和川

の「や」を疑ひたるにて即ち「や」の字を以て疑ひ且つ

歎美の意を含みたる又「花の雲鐘は上野か浅草か」の如きは上野り浅

草の「か」を疑ひたるにて即ち「か」の字を以て惑の意を示したる今此

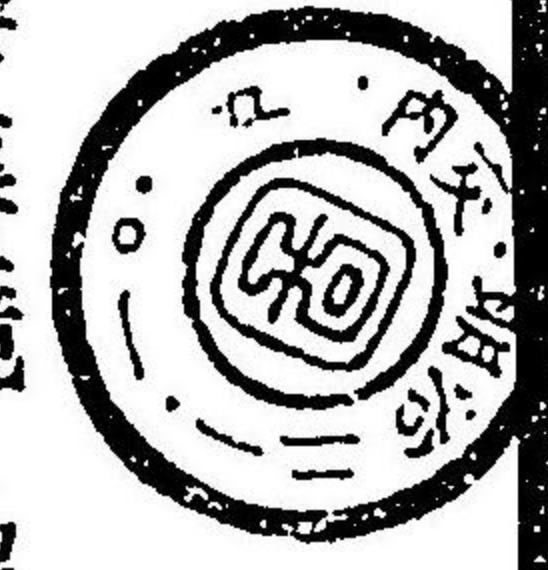
言靈の意をわきまへ其時のあやさまを考ふる時は幾百年乃昔なる蕉

翁等乃心中今なほ茲に見る如く其情も思へやられていとくあわれ

なを猶さまく乃句を取出して照し見るよ一つ一つ其心中れはり

られ且は驚き且はよろこはしこれあん心ある人くはかくやあるら

し已覺よと書綴たる壹冊あや言靈乃妙用を知り先翁等此勝れたるを



む

中結

こそ

ゆゑ

さへ

のこ

よき

から

また

らん

らゝ

けん

ける

けぞ

けれ

ぬる

つゝ

かゝ

はや

まゝ

べゝ べゝ べゝ べゝ

かな

俳諧あそびま葉

五十嵐 和絃稿

此にあくるは結ひの内てにはと云ふも乃なを言靈乃傳る處にては外
結といふてよとは俗言よも尙必用のものよて一字あやまる時は聞と
る事あたらず故に天然あやまることあさも入あを俳諧歌あとい誤を
あるはいのよそや

〇て

起す、働をあき、出て働く靈あを人の手器物の手も同一意あを行て花
を見る歸て文を書あと行てか起よて花を見るか働きなを通常とて文
字の上か起よと成夫よよして働を云左の句をよく味ふべし

袖すきて松のを契る今朝乃春

梅 古

きつと來て鳴る去けを蟬乃聲

胡 及

月花もあくて酒のむひと哉 芭蕉

右に掲けたるの通常の例なを又てと留むるは上へかへて聞くへ

露しくれ歩鶴いづる暮のけて 荷兮

江戸の左右むりひの亭主のほられて 芭蕉

又上へのへる處あきは言外へのへて聞ゆるなを

山をみな密柑乃色れ黄なをて 芭蕉

明ちらむ箱挑灯を吹けりて 跡屋

ては働き強き聲ゆゑと云下もにも多く乃詞を省きていへる事あを
たとへて働めてめしを喰ふと云如き働て金を得て米を買ふ等の詞省の
れたれとも聞人自然に聞あやまる事なきは言靈の妙なる處なを

襟巻は首引入れて冬の月 杉風

門松をうまて蛤一ト荷ひ 内雷

人よ家を買はせて我は年忘 芭蕉

てはどつふもての下もに詞省きたるあをはの處を合はせ考ふべし
ては働の意あをとは縮る意あをゆゑよてと重ねて云ふ時は幾度も
かゝるくあるさまをいふ事に聞ゆるあをそれは一つ働を縮めて
又他の事をなすゆゑ此一事を仕舞ては又た取出すと云ふ意あるへし
歌につくと云ふ同一意味あを

草庵にちばらく居ては打破を 芭蕉

押合て寐てはまたぬつるを枕 同

蟬丸の歌に是やこの行もかへをもわられても知るも知らぬも大坂乃
關とあるは定家卿乃直しよて蟬丸歌集にわかれつとあるを大のた
意の似たる詞なればはと直したるあを

ても前に云ぬと同一意あるは數集る意ある故働さあるものを何箇も引出して味ふ意とあるなり

とはれても泪にものよいひにくき 一井

冷汁に散てもよーや花乃のけ 胡及

夏來てもぬよひとつ葉れひとつ哉 芭

是は問それでも問をもとも夏來ても秋來てもと云如く

○に

身よ付き物よ付く靈あまよべよのこの類荷も馬か人よ付く物なぞ凡て初よ云詞よ付て外へ飛ふ事な馬よ乗る舟よ積むあとの如く北邊大人はによ下もの詞か主と成上の詞の客とする所あまよと云れよ
味はひやさ久らの花よ嫁のさき 車來

約束にかよみてゐれば蚊よくとれ 曾良

挑灯の空に詮あよほとよまき 杉風

里深く踊をよへに二三口 長虹

梅のよにむか一の一字あそれ也 芭

是らは皆上にある詞に付て云出る詞よて上の詞の外へ出ること

あよ上を客とよ下を主として云出たるあま

にと云時と上に有物に付て云出る詞ゆゑ夫へ付けることをいそてまかあわねをにと留めあるは上へかへるか言外に付べく物あるを知るへしたとへは此茶碗よと云てあよを云わぬ時と聞人は茶々水々を入れと云事をさよるべよ今眼前のことは悟安きも幾年月を経たる古人の句を見てたのつから言外の情まで思ひ知らるよとあれあん言靈乃働くところあま

朝か^らよ^し我はめ^い食ふ男^のあ^あ 芭
草の戸^に我は蓼食^ふ螢^のあ^あ 其^其角^角

此二句は芭蕉其角の應答の句よて前は酒を戒め朝早く起さめ^い
を食ふと云^い草の庵^に居て夜は蓼を食すと云を以て答へ凡て^い
の字に聞^かせを朝^のに依^り早起をな^し草の戸のま^ます^すに居
て云々と云^いことを示^した^り

はや^を來^て撫子^かさる正月^に 杜^杜國^國

新疊敷^{あら}たる月^のけ^い 野^野水^水

是は上へのへる例あり

まつ雪^やあ^とのひたる桐^の木^に 同^同

煮た玉子^なま^あ玉子^も一文^い 同^同

是は言外に聞せた^り

其外にはよもよをよ^いてあとさま^くあ^をその條^のの意味を合せ心
得^へ

うくひすの路^には雪^をま^ま残^し 烏^烏莫^莫

子供^はは万^つ惣領^や藏^ひらさ 蔦^蔦雫^雫

月雪^のため^もあ^と門^の松 去^去來^來

むさ^し野^やいく所^もみる時雨 我^我泉^泉

す^しさをわ^る宿^よてね^まる也 芭

○を^をれ^を輕重^{あれ}とも同^い靈^{あり}

奪外^を結^ふ外^に起^る靈^{あり}箱^の緒^のる^ると名付^たをよ^く當^れを自
然^の受^渡に^に必^ずを付^てい^ふな^をた^とへ^は此^をあ^をぬ^ま葉^とと云
時は御覽^ナサ^へと^か御求^クタ^サへ^との云事^乃中^たち^にて彼^よを是^へ

導くなぞされと尋常のものよはナと云はずとも聞ゆれともさわ爲
ましき事をなさぬとするに必すナ^レの字をつらふべし器物に緒を付
るも他へ持行のぬ爲なぞ其處に置くには左程緒の必用もなき筈なぞ
又をと留^メたるは上へかへるか言外に受る詞あるべし俳句には少し

蝙蝠のれとかに^レつら^レをさし^レ出て 路 通

山ふしや坊主をやとふ魂まつ^レ 沾 國

いそかしき中をぬけたるすよと哉 激 月

うき人を枳穀垣よぞくよらせん 芭

ない袖をふ^レてとするももの思ひ 利 牛

是らは一^レ方のものを取り出して此方につらはん爲のナ^レを付るな

ぞ

をよとは相反するか常なぞたとへは白菊霜をよとわきを云時は白

菊が霜をよとせしめて霜の見ゑぬ事なぞ是を白菊霜によとせすと云時
は霜か白菊をよとせすと事と成るかく相反する詞なれどもをよと云ても
よと云てもよろしく聞ゆる處あざいとまさら^レよをよは彼方のものを
此方にて云詞には彼方に付ていふと心得へし射水神社をよはいと云
と射水神社に拜せと云を味ふへし又俗語にジャニ ジャノニ ノニな
と云處をよと云あぞ

若つあさを珠數もたもはす納代守 丈 艸

若ら菊や素顔てとんを秋のしも 野 水

いそあしき春を菫の柿袴 洒 堂

又歌よものをよと云處を俗語のまよのよと云るあぞ俳諧の自由ある
徳なぞ

青くてもあるべきも乃を唐のらし 芭

ふを汁や鯛もあるのよ無分別 芭

○ゑ へと書處も同一意あり

與、フ内を集る靈あを江繪のるゑ都へ行などへと書けども凡て此のゑのゑは裏表となるをは外に起るゑは内へ入る義なを東京ゑと云時は行くとかつかさずとの云へー東京をと云時は見て來たとか見ぬとか云へー之内外の違ある處あり

海へ降る霞や雲に波乃音 其角

さみたれや隣へ懸る丸木橋 素然

いふ事をたよ一方へねとけを 珍煩

その玉を羽黒へかへせ法の月 芭

山城へ井手の駕あるくくれりあ 同

此處にて味ふへー山城にといはよ山城に居て云山城へと云時は他の所よ居て云事となるなり

○も

集る數寄る義下もよ動く靈あを藻と云草は本は一本にして末數々よ分れ常よ動くものなを此草の形容も乃靈さなをらあれは名に負はせたるなを數寄るとは硯持て來れと云て筆も紙もと云時は皆硯と共に持來る事と聞ゆる家來も酒好ありと云時は其主人も酒好ある事知らる之もの字乃本義なをゆゑよ且那が酒好あるよ僕も酒好よと云やうのつゝへ方をよろよからす其一方を云て他を聞ふするが言靈の妙あるべし

このくれもまたくを返し同一事 杉風

人よ似て猿も手を組む秋の風 除 頑
 この頃はまづ挨拶もさむさのな 示 蜂
 一本乃茄子もあまるすまひのな 野 水
 初くくれ猿も小蓑をそけ也 芭
 是らそ一方を云て一方を聞かせたるつかへ方あぞ

もの音は数寄をて下に動くゆゑ定まらず定まらされは思事に成る也
 心中ハ定まらざる時は種々乃思へあると同一事あぞ歌俳諧ハは表ハ
 本意あらぬ筋をいひて我本意乃筋にたもひよせさせんとする心をも
 の字ハ聞かせたるなぞ

あゝく〜と日はつれなくも秋の風 芭
 笠ぬきて無理よもぬる北時雨 野

〇と

算 隔 遮 カゲラ サヘケル とめとむる靈あぞ戸は隔テ遮を又柱ハ當を止る意あぞ硯
 と筆と紙となど云もかそへてさへさる意あぞ又向ふよぞ此方へ當る
 有此方よぞ向ふへ當るあぞ俗語ハト思フト見ルト聞クト云フ
 ト爲ルト云を省きてとの一字よてまこゑさせたるあぞ

花見よと女ばかりぞがつれ立て 芭
 ねふた〜と馬にはのらぬ菫艸 荷 兮
 あよ事もあ〜と過行柳りあ 越 人
 す〜さを忘れと抄れ栗りあ 雲 峯
 ある人よあ〜と花見りあ 去 來
 隔
 すこ〜とつむやつますや土筆 其 角

名月や鞍乃聲と犬のこゑ 土 水

算

川上と此川下や月乃友 芭

あるとあきと二本さしけを芥の花 智 月

又其儘よみ入れたるあま

下々の下の客といはれん花の宿 越 人

あた花の小瓜とよゆるさきを哉 荷 兮

よひ乃内をらくせし月の雲 芭

ちる花を南無阿彌陀佛をゆふべ哉 守 武

此ちる花の匂よいふをゆふをかけ用ひたるは俳諧よはあんあ

を雖も歌にはよからす近世かまはす用ゆるは我まゝの事を

か

又やとかと云あを是は上の字の靈を受けて心得へーやは疑ふ意か又は
惑ふ意あれは夫れを押止るゆへに試る意となる

盆の月ねたると門をたふさけを 野 破

明月や富士とゆるると駿河町 素 龍

一重のと山吹のそくゆふべのあ 襟 雪

名月の花のとみゆて綿島 芭

又とてと云あを是はての靈加る故押定て何をするると云様よ聞ゆ俗

語トヤラトイフテ思フテと云ふ類なを

いらぬとて大わきぎも打くれて 正 秀

米搗もけふはよとてかへる也 支 考

志のふ間のわざとて雛をつくらる 野 水

すゞめとて切ぬきよけぞ北の窓 同

誰とても健ならは雪の旅

卯七

上ヶ土よいつの種とて麥一穗

立寮

とてもと云時はもの靈加る故意も亦違ふなぞてももの處を見て味

ふべー

ともと云はもの數寄る意との算る意と同様聞ゆる故に只もと云
と同一事聞ゆるなぞ

ふらずとも竹植うる日は蓑と笠

芭

青くとも木賊は冬の見物な

文鱗

○の

延廣ク續ク靈あを越中の砺波郡の何村の某など續く類又中のものを
取出す意となる人の目の玉など云るなぞ

枯芝やまよかけろうの一二寸

芭

初あら一畠の人のかけまはを

支考

梅り香や酒のかよひのあたらしき

蟬鼠

是等は皆其内よを取出して云のけろふの飛ふともそかなきとも
色とも云はるゝ其内よをたけの小さきを取出して枯芝に當たる
なぞ畠の麥とも景氣とも何よても多くある其内よを人取出し
人の内よをかけまわると云を取出したる又の如くと聞ゆるも同
し意なぞ

秋かせ乃舟をこわかる浪の音

曲水

あら露のむれて淀める女客

越人

又がと云處をのと云るあを歌あとも近世は多くよめをいとまぎら
わしきつかへ方なぞがの處を見合すべー又言靈眞澄鏡に論ひ置たを

意は同一事にて種々の内よを一つを取出したるなを

猿引の猿と世をふる秋の月 芭

蝶の來て一夜ねよけを葱のきと 半 殘

○は 則わと云處あをはと書は假名つかへの定ぞあればあ
を聲は則わと云故此靈のはたらきとある茲よ掲るはわの
靈と知るへー

圍廻り縛ちめよする靈あを多クの木を寄せてちめよする桶の輪あとの如く秋はと云時は其下もよ云詞皆秋の内よあをて外へ出ることぞあ
ぞがたし故よはと云たる下もは皆上の譯がらを云事となるなを

山さとも万歳れそしう先此花 芭
名月や所は寺乃茶の木はら 昌 房

牛の行道と枯野乃としめ哉 排 醉
馬とぬれ牛は夕日乃村しくれ 杜 國
みよし野といりよ秋立貝此音 破 立
いあつまやき乃ふと東けふは西 其 角

○や

疑へ中よ有ル飛走る靈あを矢と彼方よを此方乃中よ有て飛走るもの
あを則矢と名付たを京や大坂と數十里隔をたる處をも直と云とるよ
はや乃靈あればあを
やの働き種々あれども靈此かこる事なく第一歎息れ餘をよ云やあを
是は矢を放つ如く已が思に餘をすべあき時其情を飛走らせてやる爲
に云出せるやあを第一勝れたる情よを云出るあを是と矢を放るやれ

を飛走る事の速にして他に及せざるよを勝れたる意と成第三兩端を
疑ふ第四中に立つやなを

第一歎息乃や

古池やかまつとひこむ水此音 芭

古池を昔一大家よを魚類を生を爲に設けたるを池と云其池乃か
く荒たるを喩したるを篤好著されたる雉岡隨筆よ見よ

ふるさとの梅や難波此二年越 同

難波津に咲や兄此花乃歌よよみ出せるにて意よく聞へたを

髮剃や一夜よさひて五月雨 凡 非

いよよとも見定かよよひ此月 一 泉

夏の日や見るまよ泥乃てまつけて 荷 兮

第二勝美のや

文月や六日もつねの夜よは似す 芭

鶯や柳のうしろ藪此まへ 同

岡崎や矢矧の橋乃長きりあ 杜 圃

自由さや月を追行置炬燵 舊 木

早稻刈てれたつきか不や小百姓 九 龍

第三疑乃や

寒からぬ露や不たん乃花此蜜 芭

すおくとつむや摘まよや土筆 其 角

柳よき陰ぞよらよ鞠なきや 重 五

露の蜜かを疑へぬるなれを尤意味ある句なをば一書に桃隣か
新宅を書れぬれを牡丹に富貴の序あるを取て其蜜の見ゆるを新
宅のゆたかに榮ゆると云をよめらせぬを

子やまぬんあまを雲雀の高あゝを

杉風

子やなかんその子比母も蚊のくはん

嵐蘭

子やの句かど云てもよきと心得る人もあらんかど惑ふ意ある時

よつかふやは疑なを故よ待か待ぬんなくかなかんの兩端を疑ふ

ゆへやと云ぬるあを

第四中よ立や

あとやさき氣のつく野近の郭公

重五

森の蟬をよき驚やあつきあゝ

乙州

よきとく瓜や苴やよなひ込

且菜

其外あれやぬれやなどあを疑のやあをあれやとなれそやの意よて俗

よチヤヤラといふ意あを

一夜りを宿を馬のふ寺あれや

野水

酔さめの水の此みぬき頃あれや

傘下

○か

惑ッ測らす、光をのよやく靈あをかど彼を定て指べき方もなきよ惑

ふなを

奥山をあられよ減るか岩の角

湍水

神迎水口たちり馬の鈴

珍碩

あらくと碎けよ人の骨か行

牡國

あからよ二日の月の吹ちるか

荷兮

狼を伐ををかへすよ鉢ぬよき

沾圃

いくりあくれりけぬく勢田の橋

丈草

麥めよやつるよ戀り猫の妻

芭

ろろくと山吹ちるか瀧の音 芭

花の雲りねと上野り浅草の 同

花の雲を誤りて花曇ると云をりく聞つぬへると云説あれを
も花の盛衰を雲りと疑へぬる事古歌に多く入あいの鐘に
花やちるらんと詠みぬるもあれと是らよよをてよみぬるなるへ

其外てかゞりの望のよかとかもやせもあるへーかとかとの處よ出
をを見合すへー皆惑ふ意なをりもとかあよ同ー

六玉川高野の外は清水かや 去 來

一里はみな花守の子孫かや 芭

かやを云時は惑の内は勝をぬる意あをやの條合せ考ふへー

○あ

止ル押留る靈あを行くあ見るあの類又ものよ名も押留る意なを故に
など云時は疑ひなをら向ふへたー付る意よて俗よ此花ヲ折タハ其方
シヤナといへる如く歌よと多くよみたれとも俳諧よてとかくあると
兼て注意を云付る心よ聞ゆるあを

春のせよこりすあ雛の駕籠の衆 荻 子

朝かやをその子にやるあくらふも此 抄 兮

をとあへー鶴坂乃杖にたよかれな 馬 蕙

二日にもぬかをはせよあ花の春 古 梵

こするあよ藪乃中なる梅此花 芭

うたかふあやー不乃花も浦此春 同

むさんやあかふとの下れきよーを 同

是らよて考ふへし押留る意あを通常勿と云に同し

又上よあ文字を置いてよみたるも意は同し

さかつきよ泥あれたしをむら燕 芭

薺つむけふはあ焼を鳥部山 同

此二句ものよ懸て喩したるにて始は宴會乃句なを宴と燕と音の似たるをのけ盃といふて宴會なる事を喩し後の句は薺と薺をのけて鳥部山は無常場ある處なるゆへけふを薺ある無常の畑をあられと喩したるなり

○よ

呼、顯起、寄集る靈あを多くは向ふのものよ心つゝす知らさる方へ引よせて思はする意なり

うくひすも水あひてこよ神此梅 龜 舊

春の雨弟ともを呼てこよ 鼠 彈

あかつきの目をさませせよ蓮此花 芭

かぬつおを角ふをけよ須磨明石 同

うき我をさひしらせよかんと鳥 同

たひ人の心よも似よ椎此花 同

呼起すよの例

ゆく年よ京へとあらは狀ひとつ 湖 春

折るけの火をとる虫乃あはれさよ 欄 丸

七夕よ物かす事もなきむか 越 人

涼しさよ堀よまよる竹此杖 卯 七

みち汐の橋乃ひくさよけふれ月 利 牛

○そ

示シ身に添外ニ添の靈あぞゆゑにそといふてひをかニ喻す義あぞ又
たのむ義あぞソウ思へヨといふ意なぞ歌にトいたくな吹をイたく
なふぞそなどよめぞ俳諧トさりよふの處はなと云てそとは云されど
ゆそとあとはたのへあぞあは心付レさる處を押留る意を示す意あ
ぞあの條ト掲けたる句トよぞて心ふへト

○あ

強シ染徹シの靈あぞ歌トは心トあるらト時をト待む君をト待むあとト
首ト眼目と云處をよめぞ俳諧トは二様あるト一ト既往の事をいふト

を助字と思ふ程の處トつかへたぞ是と歌と同一眼目の處なるをさわ
なくして只其様子をたもとする意と知るへト助字を心得へトらす

一の例

廣庭に	一	も	植	一	さ	くら	あ	笑	草
さ	ゞ	ー	さ	や	あ	乃	庭	を	さ
へ	住	す	て	一	曾	良			
は	か	ら	れ	一	雪	の	見	處	あ
る	所	野	水						
夢	よ	み	一	羽	織	は	綿	の	入
よ	け	を	同						
霄	よ	み	一	橋	は	さ	ひ	一	や
月	の	あ	け	一	鬚				
封	つ	け	一	文	箱	來	た	る	月
の	暮	芭							

是らは皆既往即過去の意を云あぞ今一例は是に似たれとも現在
の事を云なぞ歌よてはあるまト事あから近世は我儘トあかれ
たるへト

麥蒔て、奇麗に成し、いそを哉

昌 碧

冬よをはずくあうなを、池此鳴

沾 圃

是らは現在の、いなを前、掲けたる封付、も現在に似たれとも封の付たるは彼方にて我方へ來をたる時は既に過去の事と成れを又文箱とあせて月の暮とある故自然過去の事思へ知らるゝなぞ

○が

顯レ生出る清音の靈一きは強くなるあを筆か硯かと清ていふ時は其品の定まらざるを濁をていへは筆が活て筆がも乃云といはるなを又のと云處をは近世まがへたる多し君り代と云は類有る御代の内よを君れ代一代を取出していふ意あを君の徳をよめて千代八千代と祝ふ

意乃時は必ずがを云へよく味ふへ

春雨や光をうつろふ鍛冶が鋸

排 首

花のあと躑躅の方がたもいろい

里 圃

時 鳥鳴く風が雨よなる

利 牛

夏草やつとものをもが夢れ跡

芭

山うつが案山子つくをてわらひけを

重 五

是らよても生出る靈あるを知るへ、の遺へ分たる句は一孫があとよる祖父乃借錢馬地といふの如き孫があと取は主なる故よめて云はさるべからす祖父の仕業色々の内よを借錢れ殘をたるを取出して云處あれはの、と云たを能かなへる是らは天然に知らるゝものを誤をあるはいかよそや

晦日も過行うはが亥の子のあ

尙 白

清音の甚たしきあをたる例

誰やらが姿よ似とをけさのはる 芭

○ぞ

差、物に當る清音の靈一きは強くなるあを故にひをかよさとすの意
となる又清音には願ふ意あれどもあは強ゆへ其意をなくて人を驚
て云程の意となるなを

年よれば聲はるよぞ死をくく 智 月

蛤の二見よこのれゆく秋ぞ 芭

かくさぬぞ宿は菜汁よ唐からく 同

よよ野よてさくらみせうぞ檜木笠 同

又疑ふ心あを本意よはりわる事あり

あよ事ぞ花見る人の長刀 去 來

卯花よたが傘ぞいまくく 長 虹

秋ふのき隣はなよ茨する人ぞ 芭

又中に立て彼ぞ是ぞと云つゝのへ方あを彼ぞと差て云なを

佛よを神ぞたふときけされ春 と 光

雪の日は竹子笠ぞまさをけを 羽 笠

ちら菊のちらぬぞ少一口をくき 昌 碧

れほはあくあさまぞさるる神は梅 舟 泉

唐人と
吉田の
驛にて寒けれと二人たひねぞたのもよき 芭

北邊大人此寒けれとの詞つかへ妙あをと云置れよをけよ二人旅
ねぞと指ふるよて彼れ大人らの二人の旅ねあれはさぞぬのよ
き事は今も尙知らるよなをされとも寒けれと二人たひねぞと云

までよては越翁芭翁の旅なるやを知るよくなきをたのもし
きと云さるよて女など乃旅ならぬ事を知らせたをかよる詞つり
ひと今世たもへもよらぬ事ぞ蕉翁の人から此一首にて思
ひやるへー

○で

清音此一きを強きをたるにて至極強くなるゆゑ清音に反する事
あを見わたと云處を見わたと云時と反對の詞となるされと見ふす
見ふぬと云時は其下もに詞なくともたるへー見ふすと云時は下もに
は何と働を云はさるべのらす是働ある靈あればなを

うとくとも見ふで畑うつふもと哉 去 來
かさ木にならで年をる柏のな 一 晶

老の名のあをともあらで四十雀 芭
縫物や着もせでよとす五月雨 羽 紅
手をのけてをらで過行木槿のな 杉 風
又名の下もよと云時は其品が直く働を也土を以て家を造る扇
を以てたよくと云如し

つばくらを土で家する木曾路哉 猿 稚
つるりねを扇でたよく花れ寺 冬 松
八九間をらで雨ふる柳りな 芭

八九間空で雨ふるの如きはよと云様に聞ゆれともこそ八九間
空に居て云事にて則空が直く働を雨をふらすと云事にて土でと
云に同し

及、端に至る又清音の靈に閉き延る意あぞ則一きは強くなるあぞ故
にものゝ端に至ぞて夫よぞ引かへして云事に成るなぞ日暮れば改め
て夜に成る雲出れば雨と成るの如き意あぞ

みこたせばなかわわはこれば須磨此秋 芭

見渡はを云も見るかさの端に至るまで茂云意にて夫よぞを何
と云べきなぞ

又はと留をたるそその條に云と同一く上へかへぞと聞ゆる猶言外に
詞あるべし

秋蟬の虚よこゑきをなつりさば 野 水

反當^{カレ}戻清音の靈一きは強くなるたとへは夏も暑けれど住やすへ冬も
寒けれど静あると云如くかへぞて解く心あぞ

むさし野と思へど冬の日ありあ 洗 悪

となくよ咲そろはねど梅此花 野 坡

月はあれど留守のやう也須磨此夏 芭



此よぞ末にあくるを傳に内結と云ものあぞ委しくは言靈真澄鏡に付
て見るへし

隠れ納る事絶てなきの靈あぞすと云に二様ののよるようあぞ一はあ

此韻よぞのゝる一はいゑの韻よぞかゝる此かゝるようにて少一違へあれどもくたくくければ略す

あの韻よぞかゝる

この筋も銀も見らざらず不自由さよ	芭
澁柿や鳥もくそが荒そたけ	正秀
涅槃像赤き表具も見にたゝず	沾圃
名月やなにも拾はず夜此道	野萩
いゑの韻よぞかゝる	
むつりき柏子もみゑず里かくら	曾良
春雨やあらゝもはてず戸のひつこ	嵐蘭
さひーさの色をたゑゑずかんこ鳥	野水
市中よ木葉も落す木曾此鳥	乙州

○ぬ

力ら及はず事至らざる靈あぞと云よぞは一段強くてふたゝひ外の筋にそあらぬをさすとす詞あぞぬと云よ三様乃たのへあぞ一はあの韻よぞかゝる二はいゑの韻よぞかゝる三はいの韻よぞかゝるいゑの韻よぞかゝるものに違あるなり

あの韻よぞかゝる

もゝの花境ゝまらぬかき根のあ	鳥巢
いゑの韻よぞかゝる	
時鳥かすの出されぬ格子のな	野坡
精出してつむともみゑぬわり菜哉	野水
いの韻よぞかゝる	

例句みゑす咲きぬちをぬのるゑあを是は反對乃詞とある
あを

〇つ

強を續き換ふへのらさる靈あをたとへは何より成すつと云時はかく
なをたるも未だ其儘よして外よかへる處なきをさとす詞となるなを
つはいゑの韻よをよる

いねくくと人にいそれつ年此をれ 路 通

観音のいらり見やをつ花此雲 芭

れくられつれくをつ果は木曾此秋 同

人はいはれつなどそ外にかへる處あきをいりにせん世間は年暮
よていそがくやあらん已他へ行處あきせんあきも其處よ居る

と云を言外に知らせたるなを

〇み

治る留る靈あをたとへはのらみと云時は其のらみの出處を思はする
心あをゆゑに向にあをて我ものよならさるを云俗にニヨツテを云處
と同一

あけうすみ行燈けりに起こひて 野 水

鴨川や胡摩千代祭やよ近み 荷 兮

肌さむみ一度は骨をよどく世に 同

みやさはよく似たをみはのよを續くとをよを續くと只よ續くと
あを此例句はたゞに續くなを其餘の例句見ゑすわさびのからみ
と云如し

○さ

ひろびろさわを靈あぞたとへはりらさと云時はその味ひのもとよぞ
その内にあるを其儘云詞なぞゆゑに我方にあるを云さはのよぞ續く
とのよぞ續くとあぞ

薺やのきやのまゝトさらくぞ 文 鱗

並松を見りけて町のあつさゝあ 臥 高

引たてゝむまにまとするた茂やかぞ 芭 薹

百姓よあぞて世間ものどのさよ 鳥 薹

是らよてみぞ合せ味ふべし

○き

限ぞ、極る、疑ふべのらざる靈あぞ俗よキツトキイタ キツトユカウ
なぞ云キ乃字の如くゑのとあぞしを云心なぞゆへに前よあぞし事を
人疑へを思ふ時は云詞なぞと知るべしゑの韻よぞかゝる

志をれきやあらひかねたる鯨舟 千 那

○む

定る、其事なすに定るの靈あぞ俗にサスルあと云詞あぞす乃かゝる
様よ似たぞ

すかれく柳は風にとぞつかむ 一 笑

○此外なも此處に再ひ入る例あれとも前に出たれば茲に出さず
言靈眞澄鏡を見て知るへし

以下掲る處は言靈の傳にて中結と云中結は二様あり名のつあき詞の
つあきあき今是に從て分つ

中結乃つなき

○こそ

評論、裏あることを云春こそと云時は冬も何くと云如く一方を云て
裏を評する詞あり

元日に田毎の日こそ戀しけれ 芭

白魚に價あるこそうらみなれ 同

わづらへば餅こそをねもよれ花 同

喰物に味のつくこそうれしけれ 珍 碩

炭賣のたのが妻こそ黒からめ 重 五

是等を皆言外に裏あるを知らせたる也猶一きは言外の情のふかきは

されはこそあれたまよ乃霜此宿 芭

そつざくらまた追ふにさけばこそ 利 雪

是等は多く乃詞省きたるもよく聞ゆるなぞされはこそと云詞はかね
て思ひしまたかはぬとか云事を聞かせて言外乃情を知らする也初櫻
乃句も追ふと咲けばこそさ程にもあそれと思そぬを云事を省て若し
咲かされそいかよせまよを言外よあらせたを

○ゆゑ

ものよれこそを云順は行なを夏ゆゑあついで冬ゆゑさむいよと云如し

なよゆゑぞ粥すよるよも涙をよ 去 來

蓑虫も茶の花ゆゑよをられける 猿 雕

○さへ

さはあるまゝ事のあるを云夏さへ寒い冬さへ暑いあを云類あを
万葉集の歌よてはたよすらと云ゆつりへ分たれとも近世はまがへて
これらのけいめ分がたし俳諧は猶混して凡てさへとつゝわれたる
今一これ分て論ふもいさあき事なれば余は略しぬ

すゞーさやこの庭をさへ住すてー 曾 良

馬をさへなかむる雪のあいたるな 芭

はな一さへ調子あひけを春れ雨 乃 龍

右は皆あるまゝ事のあるを云にてさへの意よりなへを

あやめさす軒さへよそのついで哉 荷 兮

是をすらと云方なをすらは類をあけて云詞ゆゑあやめ咲軒すらと云

時は言外まゝして外の事は何にも見たる事もなうなど同く面白き花
など此類茂聞かせて此頃のせわしれを知らざるなを

○のと

一すぢよ續く形、外なきよを云俗言にバツカリバカリあと云よあ
たるあを

蛙のときよてゆよき寐覺かな 野 水

郭公白湯のときたきてぬるよかな 李 風

月のこの雨に角力もなるをけを 芭

バカリと云とのことさかへある此處に掲げぬるはバカリにて
解し安きなを歌よいつをもそのあき世なをせはいりその人のご
どのほうれーからまゝ茲にはかをと云は程を心得て宜し

○よぞ

物の内よ出来る處あるを思ふするなぞ故にさす處あぞてそこよぞ外にたもひうつす時の詞なぞ

くらきよぞくらき人よふ螢かな 風 笛

なぞあひや初花よぞの物わすれ 野 水

つくくく頭巾にぬるひとつよぞ 春 江

草りぞの袖よぞいつるよとるのあ 下 枝

袂よぞ硯をひらき山かけに 芭

是等は皆内にある處よぞ是にと云俗よカラと云に同く又君よぞ外に知る人あきぞ云如きも同く意あぞ

雪の日乃大舟よぞは小舟のあ 芳 川

麓よぞ足ざそぞよき落葉のな 一 道

雲雀よぞ上にやすらふ峠のな 芭

是等は一方の彼にまざる哉いふ

○から

もとの起ぞよぞ云義なぞよぞ乃俗語のようなれ共さにあらずカラと彼方を主としヨリは此方を主とする心あぞからそ人いらぬ時に自らこととる詞あぞ身から心から已り事をうけていふことたれし故に彼よぞ我へ我から彼へといふ程の違あるべし

若葉からすをにありめの冬木のな 藤 蘿

後よびの内儀は今度屋敷のら 支 考

隣のらせつゝ嫁茂よびに来る 野 坡

きのふから日和のたまる月の色 沾圃
右のたのへあると雖も近世は歌よもいせまぎれたる多し

○まで

其處まで行至る心故に凡人のかきまどまる處あるを乃向の限ををさ
とす時の詞なき

八重霞奥までとさる龍田川 杜國

峠まで硯抱へて月見りな 任地

野菊までぬつぬる蝶の羽ね折て 芭

なまよけま〜まで年れくれ 同

此のままでほりま〜と云三言まかゑやす〜よく味ふべし



中結詞のつなき

○らん

自ら疑ふとらへられんも此茂無理し押定てかゑあらんと思ふなき俗
よデアロウと云處あるべし

年れ市ぬれ茂よふらん羽織どの 其角

いさそつは男なるらん杜若 一井

字せつきは自慢いそせて遊ふらん 野水

月れ朝字くひ寸つけに急くらん 同

○らゝ

他にあること茂さま〜れもひ見て七八分か〜あると知るなき俗に

シヤソウナと云處にてらんよはさかなを先證據茂見て言出すと心得べし

あゝこまる諫は涙こそすらし	野	水
麥茂わかれ花は溺れぬ雁あらし	素	堂
めでたくもよはれにけらし生御魂	野	水
そのかみと谷地なまけらし小夜佐	芭	
かゝまゝる生御魂小夜佐り證據あり		
茂茂わかれの句は證據あり		
あれらそらんと云べく處なり		

○けん

過ぎ去ぞたる後よて定むるあり俗にタデアラウと云處あり

鎌倉をいきて出けん初鯉 芭

初鯉を見て過たる事を生て居たと定めたる也

○ける

先に成るたるを云今心付たと云處なり

烹る事をゆるしては世を放ける	杜	國
ゆく春を近江此人とを志とける	芭	
ゆとぢよそたがをへける酒乃爛	其	角

○けり

其事ありて済ぬる後よ云詞あり今思へ知ると云處あり

たもたると鯛引けを盆乃月	舍	咄
たもふ事紙帳にかけと送るけり	野	徑

三日月に燦乃あたまをかくりけを
 菊好れむまろ織けを花さかを
 田を持て花とる里に生れけを
 すこくと案山子れけを土筆
 是等に出せぬ處を今思へ知をぬと云詞に替て其情を味ふべし

之道

嵐雪

羽笠

蕉笠

○けれ

細を其事を云クヤレと云が如くけれはこそ此受なまかれと同一
 くひもれに味乃つくまそうれけれ

珍碩

○ぬる

さはあらしと思事乃力及はす遂に忘かあるを歎くまを

尺はかまはやぬわぬる柳かあ
 すけぬる御膳の箔のはけかま

小春

子珊

是は尺はりまの柳たごまどと思に終まかをなるを歎きすけま
 トと思ふ箔の遠ますけぬる茂歎くのまかはけかまをたるは彌
 切なる事を

○つゝ

續くく意あま同一事れ幾度もあるを云

とも火に手をたねひつゝ春れ風
 墨流は正月ごとくにすれつゝ
 餅淡くいつゝいとふ君か代
 一度にてはなき事味ふへし

舟泉

野水

旦菊

○かー

たよその理をれもはせんとつる詞あり

千観が馬もかせかー年此をれ

其角

○はや

思ふ事を望む意あり俗に何シタラバイカニと云心あり

蓬萊にさかばや伊勢此初便

芭

山畑にものれもとばや燕引

松芳

首出して初雪見ばや此衾

竹戸

青はして御目乃筆ぬをとばや

芭

蓬萊賣人に聞タラハイカニ春の來るは何項あるやと云思考に

て春を迎る情の切あるを喩た

○まー

あらまーいたーする事にやかてむかひていふ心有例句見ゆす

○べー

未然乃勢ひかくあまゆくと思ふ時の詞なり

べーべきべくと通ふゆゑ結びの内へ加る例にてはなきを今かまに加へて記さむ別に述ふる處あるべー

たなはとやあまをいそがばあるべー

杜若

峯の雲すまーは花もまーるべー

野水

元政の草乃袂も破ぬべー

芭

是も皆此方よどはかぞあてかひていふ心あぞ又べきと云は今一
きはさしかなぞ

たなはををいなる神よいはふべき 沾 圃

千世ふべき物をさまく子日て 芭

あの瘤は猿乃持べき柳のな ト 宅

竹乃子れ力を誰にぬとふべき 凡 非

又べくは少くはろくヤウニと云如く

わの祈明のこの星孕むべく 荷 兮

○かあ

古人とかもと云たるなぞかは惑詞よてこのかあののも猶惑の心あぞ
物乃定められた歎也なは押止る意よておめさせむとする事乃及はぬ

なげきなぞ

花に埋れて夢よぞ直に死なん哉 越 人

いく春も竹それまゝに見ゆる哉 重 五

此ころれたもはるゝのあ稻の秋 吉 房

かあは名よぞも詞よぞも續く他れ例にたのへる前よ掲げたるは

詞よぞ續く此處に掲るは名よぞ續く例あぞ

櫃乃木の花にかまそぬ姿のな 芭

雲をぞく人を休むる月見哉 同

此等此外よも此類多そあらん今見當をたるまゝを掲て後々又書つゝ
る事もあらん

七×60 ㄝ

明治廿年八月廿三日版權免許
廿一年九月廿三日出版

正價金拾貳錢

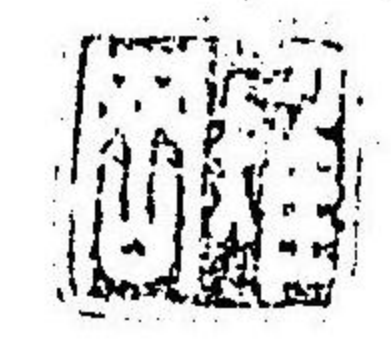
著者 富山縣平民

出版人 五十嵐政雄

越中礪波郡内島村

越中射水郡高岡横田町

發賣所 學海堂



六十

杉本新報活版所印刷

